

女性の問題とヘブライ的存在論

杉 瀬 祐

1. ヘブライ的存在論の視座

今日、女性の問題は対男性や対社会といった現象的問題としてだけではなく、もっと根源的に人間の問題として、また存在論の問題として追求されなければならない段階にきていると思う。

元神戸女学院院長・有賀鐵太郎博士（元・同志社大学教授・京都大学教授）はヘブライ的存在論ハヤトロギア（hajathologia, Hajathologie, hayathology）を提唱した。これはギリシア的なト・オンを追求するオントロギアと対比をなすものであるが、必ずしもギリシア的オントロギアを排除するものではない。それはヘブライズムとヘレニズムが西欧思想を形成する二大思潮であるように、ハヤトロギアとオントロギアは互いに相補って存在論を形成し深めるものであって、ヘブライズムやヘレニズムといった用語が甚だ漠然とした領域をもつ思潮類型であるのに対して、ハヤトロギアやオントロギアはより厳密な「存在」理解を根底におく思考態度乃至思考基本構造であると言うことができよう。

ハヤトロギアは、旧約聖書、出エジプト記3：14の「わたしは、有って有る者」の 'ehyeh' ^asher 'ehyeh（エヒイエ・アシェル・エヒイエ）に基づいて、ハーヤー（hāyāh）（エヒイエはその変化）を中心に展開された思想であり、エホバ、あるいはヤーウェと呼ばれる YHWH の神名とも関係する重要な問題点を含んでいる。この聖書の箇所は、聖書学や神学だけでなく哲学的にも古来い

ろいろに論議されてきた箇所であるが、その言語学的な詳しい究明は省略して
く詳細は『有賀鐵太郎著作集』4、「キリスト教思想における存在論の問題」、創
文社、昭和56年、特に pp. 3-57（「序論」、第一章「モーセと預言者」）、pp. 177
-200（第六章「有とハーヤー」）、その他、その中心点を瞥見してみよう。この
聖書の箇所「わたしは、有って有る者」（現行訳聖書）は例えば英語訳聖書では

I am that I am. (Revised Version)

欄外に I am, because I am.

I am who am.

I will be that I will be.

I am who I am. (Revised Standard Version)

欄外に I am what I am.

I will be what I will be.

有賀博士は、“動詞ハーヤー（エヒイエはその変化）は単に to be だけでな
く、to become, to happen などの意をも含めた作用を現わす語であって、繫辞
としての用法はむしろ副次的である”（p. 34）と主張し、“フォン・ラートも
「ハーヤー」が、特にここでは、vorhanden sein また dasein の意に解さるべき
であるとし、エヒイエを ich werde (für euch) dasein と理解すべきことを論
じているが、これは全く私の考えと一致する”（p. 34）と語って、ギリシア的
ト・オンとの根本的差違を指摘する。即ち、「○○は○○である」のような存在
の客観的、本質的説明ではなく、自らを啓示する意志的・能動的な人格の主体
としての存在であることを指摘するのである。そして歴史神学者としての彼
は、ユダヤ・キリスト教思想史において、ヘレニズムの影響を強く受けた「知
恵文学」やフィロン、使徒教父たち、中世神学思想などの文献分析を通して、
いかにギリシア的ロゴスの論理が表面上支配的に見えていても、その中核にお
いてはヘブライ的ハーヤーの思考が強く働いていることを明証しようとするの
である。このことは直ちに M. ブーバーの「<我—汝>哲学」やホワイトヘッド
に始まる「プロセス・フィロソフィー」などとの連関をわれわれに想起させる

が、このことに紙幅を割く違は今はない。ハヤトロギアは、より正確には「ハヤトロギアのカハル (qāhāl=カーハール、神のみまえに招集された民)・エクレシア構造」と呼ばれるべきものであるが、有賀博士自身によってその生存中に十分な展開がなされるには残念ながら時間的余裕がなかった。このヘブライ的思想構造は、その後多くの人々に注目されて研究が発表されているが、さらに益々追求されるべき問題契機を含んでいると私は考える。

さて、ここにハヤトロギアを取り上げたのは、言うまでもなくハヤトロギアの解説や紹介のためではなく、存在の問題に関してである。

“なぜなら「わたしはいる」ということは、神を「有ること」と定義しているのではなく、神がハヤーする者としてモーセに関わり来ることを意味する”(同書、p. 172)。

ギリシア的ト・オンでなく、本質に関わる者としての存在、関わり自らを顕わすことによって却って自らが隠れてしまう存在、こそ今日われわれが身近な存在論として取り上げるべき課題ではないだろうか。即ち、男と女が、ギリシア的ト・オンの視座やオントロジー的分析によるのではなく、(男・女)人間存在として見られるべき視座である。改めて言うまでもなく、人間は性別に見れば男と女とであり、女という人間、男という人間が存在するが、女とは、男とは、というのは二次的であり、相対的なことであって、我が汝に関わって我を明らかにすることによって却って我が隠れ、汝が我に関わって汝を明らかにすることによって却って汝が隠れて、人間それ自体が明らかになってゆく、という実存の構造にわれわれは注目しなければならない。

2. 愛と自由

茲に人間論を展開する余裕はないが、人間は死ぬべきもの、有限なものとして存在する。それは時間的・歴史的に見れば、ひとりひとりの人間は大きな社会的・文化的・歴史的連鎖の中に生きているわけで、単純な自我中心の存在は当然社会的にも歴史的にも否定される。人間は他者との関連の中にその存在を

もっている。これを究極まで詰めてゆけば、M・ルターの『キリスト者の自由』の冒頭に掲げられる有名な矛盾的テーゼにまで至るであろう。即ち

○キリスト者は、すべてのものの上に立つ自由な君主であって、何人にも従属しない。

○キリスト者は、すべてのものに奉仕する僕であって、何人にも従属する。いかなる権力や圧迫にも屈しない主体性の確立とその自由、しかし同時に自ら喜んで主体的にすべてのものに仕え、愛してゆく自由。自由は、自我の主張や権利の行使ではなく、真理の下に立ち、そのゆえに他者に関わり与え仕えてゆく自由でなければならない。それが人間という存在の主体性であり、自由である。私はこのことの根底には「死」の問題があることを指摘しておきたい。即ち、いかなる権力や圧迫にも屈しないということは、死を覚悟していなければならない。また、喜んですべてのものに仕えるということは、自分が傷つけられ損われても恐れないという覚悟が必要である。即ち、人間は mortal なもの、有限なるものとしての自己把握がなければ、個の真の自覚も愛も自由も、一切ないと言わなければならない。

性教育の実態については私は全く無知な者であるが、日本における性教育は主として性器教育なのではないかという気がする。性が単に性器や生殖との関連において取り上げられるのではなく、性が人格に、また人間としての存在自体に関わるものであるという認識が不足しているように思われる。あるいはそうした認識は既に十分あるのかもしれない。しかし、では具体的に実際に即して「人格としての性」という問題をどのように取り上げたらよいのか、という戸惑いと困難があるのかもしれない。こうした事態において改めてハヤトログァ的存在論が追求されるべきであろう。性解放や性革命が、単に性欲の解放や「オープンマリッジ」などで終わるのではなく、人間の真の解放にまで至らねばならない。このことは識者の同意するところであろう。

3. 何を優先すべきか

上野千鶴子の『女という快樂』(勁草書房、1987年)を読んで、その中の「主婦論争を解説する」(pp. 42-71)や「女性にとっての性の解放」(pp. 245-269)など、現代の具体的な問題点の鋭い指摘に興味をもったが、私が特に関心をひかれたことは、現代の女性が、何が公的なのか、何が私的なのかを問い始めているという点である。幕末において御家人であった勝海舟が、何が公けなのかを問い始めたとき、最初は当然徳川幕府が、幕臣であった彼にとって公けであったが、次に朝廷となり、日本国となり、最後には日本国民となり、アジアとなった経緯と似て、何が私的・公的なのかという問いは革命的動機とすることができよう。totalかつradical(丸のまま、かつ根源的に)という問いは、各個人でその答えが異なるとしても、われわれの判断と行動の原理として大切なことであろう。社会体制や職業や社会活動を公的と考え、家庭や育児を私的と考える人もあろうが、反面、教育や環境問題や平和などを公的と考え、利得や権力取引などを私的と考える人もあるであろう。各人それぞれの立場や視点の差異があるとしても、今日この地球において飽食と飢餓、文明の発達と環境汚染など、さまざまなアンバランスや背反する諸問題が噴き出して存在そのものの存続が問われている時代において、何が公的か私的か、という問いよりも、何が存在にとってtotal and radicalに最優先すべき問題なのかがグローバルに問われなければならない。1950年代の終わりから60年代にかけてアメリカでlong distance dwellingが流行したが、最近日本でも地価高騰に伴って「金届月来・週末村民」が流行し、会社人間であるよりも市民としての人間でありたいと希う人が増えているという。私的・公的の価値観の視点が変化・動揺していることは、社会の秩序の変化や多様化を示すものであり、人間の存在そのものが根源的に改めて問い直されていることである。ここにおいて思想的に重大なことは、ニヒリズムやスケプティシズムの問題であろう。自己の存在のアイデンティティを見失い、社会や歴史や人類から剥離脱落した、単なる個我か

らの視点に立って生きることは、自ら破滅の道を選ぶことに他ならない。

4. サクラメンタルな存在論

M. ブーバーの〈我一汝〉哲学は、ヘブライ的視点からの新しい人間回復の道として、各方面に多大な影響を与えた。殊に人間の問題を直接に取り扱う教育学においてはその影響は著しいと言える。しかし、ブーバーにおいて〈ich-du〉は必ずしも〈ich-es〉の関係領域を否定排除するものではなく、現代世界において〈ich-es〉の存在性を承認するものであると言いながら、〈ich-es〉の積極的な評価や肯定の根拠は曖昧であると言わねばならない。これは前記のハヤトロギアとオントロギアの関係においても言われうることであろう。私はハヤトロギアを念頭におきながら、サクラメンタルなものとしての存在論を考えている。詳細は『神戸女学院大学論集』所載の拙論を見て頂ければ幸いであるが〈「キリスト教神学における象徴主義と図像学」(1-7)、特にその中の「B. 関係概念としての愛 (No. 1-3)、No. 1—第33巻第1号(1986, 7)、No. 2—第35巻第3号(1989, 3)、No. 3—第36巻第3号(1990, 3)〉、私がサクラメンタルな存在論ということにおいて明らかにしようと願ったことは、人間を、愛を必要とし愛することに喜びを見出す存在として捉え、その愛の構造は、愛する者—愛される者—愛そのものの三肢構造であり、三位一体的な相互呼応の弁証法的構造であって、しかもそれは静止的なオントロギアではなく、時間の中で生成展開してゆく啓示的構造として見てゆくことであった。新約聖書に出てくる *μυστήριον* というギリシア語はウルガー・ラテン語訳聖書では *sacramentum* と *mysterium* の二つに分けて訳され、*mysterium* は奥儀や秘義自体を指して用いられているが、*sacramentum* はわれわれがそれに関与することによって時間的(歴史的)現実の中で啓示・展開されてわれわれ自身の主体的現実となってゆくような奥儀を指し示している。私は存在をギリシア的・ト・オンにおいてではなく、こうした歴史的時間の中で啓示されてゆくアイデンティティの中に存在を見ようとするのである。*sacrament* は、キリスト教会

における洗礼や聖餐に見られるように、現実的・具体的行為を通して天上的・永遠の恵みを体験するものであって、“見えない神の恵みの見えるしるし” (Augustinus) である。それは単なる神秘的あるいは呪術的儀式でもなければ、単なる象徴でもない。M. ルターはローマ教会とツウィングリを誤った両端として非難した。洗礼は死に至るまでの日々の悔改めを、聖餐は愛餐とつながるようにエクレンシアの交わりを示し、日常性と倫理性の中での実存を支えるものである。そこでは歴史的時間と永遠（神の国）とがどちらもその現実的な重さを担いつつ重視されており、それは観想の世界ではなく、〈我一汝〉の体験的世界である。

抽象的な説明でなく、もっと身近かな例で示せば、例えば高村光太郎の『智恵子抄』の詩などがある。

「あなたはだんだんきれいになる」

をんなが附属品をだんだん棄てると
どうしてこんなにきれいになるのか。
年で洗はれたあなたのからだは
無辺際を飛ぶ天の金属。
見えも外聞もてんで歯のたたない
中身ばかりの清冽な生きものが
生きて動いてさつさつと意慾する。
をんながをんなを取りもどすのは
かうした世紀の修業によるのか。
あなたが黙って立ってゐると
まことに神の造りしものだ。
時時内心おどろくほど
あなたはだんだんきれいになる。

ここには詩人の体験と直感が的確に存在の神秘を把えている。附属品を棄てて本来の自己となってゆく、それには時間の修業が必要である。そして洗われて

ゆく智恵子は智恵子であるだけでなく、女性そのものを顕現する。またそこには神の創造のみ手が啓示され、現実と永遠とは交錯してひとつの真実となって光太郎に受けとめられる。

「僕 等」

僕はあなたをおもふたびに
一ばんちかに永遠を感じる
僕があり あなたがある
自分はこれに尽きてゐる
僕のいのちと あなたのいのちが
よれ合ひ もつれ合ひ とけ合ひ
渾沌としたはじめにかへる
すべての差別見は僕等の間に価値を失ふ
僕等にとっては凡てが絶対だ
そこには世にいふ男女の戦がない
信仰と敬虔と恋愛と自由とがある

(以下略)

ここにも現実と永遠、わたしとあなたの二にして一つの姿が歌われている。サクラメンタルな存在論はこうした世界を提示するものである。ここでは<iches>の世界も具体的な重みと意義を担って受けとめられるのである。ここには光太郎の詩を引用したが、真実の愛と自由を体験した詩人たちの作品の中に、同じような例を探し出すことは容易であろう。詩だけでなく、あらゆる芸術の分野において、いな、もっと身近かなわれわれの日常生活の中に、このような事態を見出すことは容易であり、実際にわれわれは日々経験した見聞しているのである。なぜならサクラメンタルな存在論は、われわれの人間存在の基底であるからだ。ギリシア的ト・オンの存在論は抽象化と差別・対立を生む。われわれはもう一度「存在」の根源に目を注ぐべきではなからうか。

Summary

Hebraic Ontology for Women's Problem Today

Yu Sugise

Dr. T. Ariga, ex-President of Kobe College, presented his unique idea of Hebraic ontology, that is, "hayathology", which is rooted in the Hebrew word "hāyāh", and in Exodus 3 : 14 " 'ehyeh ' a sher 'ehyeh" (I am who I am). Unfortunately, however, he had not enough time to develop hayathology during his life-span. But hayathology is a very important and relevant idea for women's issues today, because it will clarify existent structures of inter-personal relationship (man-woman, the old - the young, <ich-du> etc.). And it should be developed into "sacramental ontology", which will offer a positive meaning for <ich-es> which was lacking in Buber's thought.

Greek ontology is the cause for discrimination, segregation, abstractualization for real understanding of human being, and up to now this Greek ontological view has been responsible for so-called "Women's Problem". Today, we should change the point of view and discover the real and vivid, co-relational and compatible relationship between man and woman, person and society, person and nature, person and matter, person and technology etc..

Contents

1. A view point of Hebraic ontology
2. Love and Freedom
3. What is the priority today?
4. Sacramental ontology